The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対話と真理 : ソクラティク・ダイアローグの理論的前提
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2001, 35, p. 47-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対話と真理

――ソクラティク・ダイアローグの理論的前提――

寺田俊郎

哲学的対話の方法であるソクラティク・ダイアローグは、ヨーロッパを中心に多彩な展開を見せている。その形態も、テーマも、目的も、一週間合宿して純粋に哲学的対話を楽しむものから、倫理学の授業、成人教育、企業の管理職の研修、刑務所での受刑者の対話に至るまで、実に多様である。二〇世紀の初めにカント主義者のレオナルト・ネルゾンが実践していた哲学教育の方法が、今日これほど多くの人の、しかも多様な関心を集めているということは、興味深い事実である。

私は、ソクラティク・ダイアローグに、哲学的対話法としての可能性を感じる者の一人である。しかし、その理論的根拠については、まだよくわからないところも多い。ソクラティク・ダイアローグは、後で簡単に紹介するように、独特の規則と手順に従って進行する。最初に参加してまず印象に残るのは、この規則と手順である。他方、規則と手順はかなり整ったものであるにも関わらず、対話はしばしば紛糾する。参加者が「自分達はいったい何をしているのかわからない」という気持ちになることもしばしばである。そして、実際、何の結論も得ないまま、時

間切れになることも少なくない。当然参加者はとまどいを感じることになる。そもそも、ソクラティク・ダイアローグがこのような対話のプロセスを踏む根拠は何か？何を達成することを意図してこの対話のプロセスが採用されているのか？

ソクラティク・ダイアローグの実践の理論的前提を明らかにすること、これが本稿の目標である。ソクラティク・ダイアローグを日本の実情にあわせて展開していくことに役立つとともに、一般に、哲学の方法としての対話について考察を深める一助ともなれば幸いである。

一、ソクラティク・ダイアローグの理論的前提の問題

ソクラティク・ダイアローグの基本的な進行はおおむね次のようである。[1] 六～十二人のグループで、まず、テーマとなる一般的な問い（たとえば「責任ある行動とは何か？」）に則した具体例を参加者の経験から選び、その例について下される判断についての合意を得るよう努める。さらに、その判断の根底にある原理、確信、価値観が明らかにされる。このプロセスを通じて、テーマとなる問いに普遍性をもった答えを与えることを目指すのである。

その際、求められる心構えは、対話の始めから終わりまで参加すること、積極的に対話に参加し、明確に意見を述べ、長々と演説せず、他の参加者によく耳を傾け、理解しようとすること、協力して答えを得ようと努めることである。また、遵守されるべき規則は、何らかの権威に基づく意見ではなく、自分自身の考えを述べること、どの段階にあっても参加者の合意が最優先されること、提出される意見、推察、疑問の理由を示すこと、などである。

進行役（ファシリテータ）はいるが、対話の内容には直接関与せず、対話の進行のみに注意を払い、グループが

できるだけ生産的な成果へと至ることができるように、対話を制御することを任務とする。

グスタフ・ヘックマンは、ソクラティク・ダイアローグの目標と手段について、「根拠を共同で吟味することによって一つの問いに含まれている真理に近づくこと」[2]と述べている。しかし、合意を得た判断の根底にある原理、確信、価値観を明らかにすることによって真理に近づくことができるとは限らない。そこに見い出されるのは、誤った先入観であるかも知れない。自分の先入観に気づくことそのことは、意義のあることだが、しかし、それがそのまま真理への道だというわけではない。実際、ソクラティク・ダイアローグを実践する人々は、必ずしも真理の探究を目標としているわけではない。具体的な問題の解決、自律的な思考の涵養、コミュニケーション技法の訓練、民主的市民の育成など、ソクラティク・ダイアローグにはさまざまな「効用」がある。ソクラティク・ダイアローグが広く実践されているのは、その効用によるところも大きいのである。

ソクラティク・ダイアローグについて語られる時、創始者のネルゾンがしばしば引き合いに出される。しかし、ネルゾンの名はよく出てくるものの、ソクラティク・ダイアローグの実践とネルゾンの哲学の内的連関について論及されることはあまりない。ソクラティク・ダイアローグの創始者がネルゾンであるとすれば、それはネルゾンの哲学に何らかの根拠をもっているはずである。しかし、奇妙なことに、ネルゾンの哲学とソクラティク・ダイアローグの関係を主題的に論じる論考のなかには、ネルゾンの哲学とソクラティク・ダイアローグの本質的な理論的関係を否定するものもある。

たとえば、レーメは「ソクラティク・ダイアローグの実践に明らかに見られるような、認識のはたらきと合意形成の討議的・論議的プロセスとの結びつきは、ネルゾンの認識概念のなかにも、抽象の遡及的方法のなかにも、体

系的な位置をもっていない。」[3]という。そして、ネルゾンが、ソクラテス的方法を、独自の哲学の方法たる「抽象の遡及的方法（regressive Methode der Abstraktion）」を伝授する哲学教育の方法として構想したのに対し、ソクラテス的方法を継承し、ソクラティク・ダイアローグの形を整えその普及に尽力した弟子のヘックマンは、ネルゾンの教育法としてのソクラテス的方法を、ソクラティク・ダイアローグの一つの応用と見なし、ソクラティク・ダイアローグの可能性をもっと広く捉えていたことを指摘している。「ソクラティク・ダイアローグの一般的概念は、私が定義したように、授業以上のものを含む。」[4]そして、ネルゾンが学としての哲学の方法論を確立しようとしていたのに対し、ヘックマンは、方法論的問題にあまりこだわらず、高等専門学校での哲学のセミナーの長年にわたる経験に依拠して、自らのソクラティク・ダイアローグを鍛えあげたのである。[5]今日我々が知っているソクラティク・ダイアローグは、ネルゾンの哲学の理論というよりも、ヘックマンの実践から得られた経験知に基礎をもっていることになる。

むしろ、ソクラティク・ダイアローグの理論的根拠は、ネルゾンの哲学にではなく、アーペルとハーバーマスの討議理論に求められることが多い。先のレーメも、ネルゾンの主要テーゼである「理性の自己信頼（Selbstvertrauen der Vernunft）」を、「コミュニケーション的理性の認知的可能性に対する信頼」[6]と読み変えているし、グロンケは、ヘックマンのソクラティク・ダイアローグをも含めてソクラテス的ではなくプラトン的であると断じ、アーペルの「背後に回ることのできない論議のア・プリオリに、哲学することの新たな基礎づけを求める現代の趨勢は、ソクラテスの対話のパラダイムに、先行するあらゆる哲学にもまして根本的な意味で一致している。」[7]という一節を引いて、次のように述べる。「ネルゾンとヘックマンの伝統のなかにあるソクラティク・ダイアローグは、

純粋に哲学的な対話ではない。それゆえ、ソクラティク・ダイアローグの目標と規則とを自ら根拠づけることはできない。それに対して、この基礎づけは超越論的な討議語用論によって遂行され得る。[8]」さらに、「ソクラティク・ダイアローグは、討議理論の、教育を志向する形態である。[9]」

しかし、ソクラティク・ダイアローグが討議理論の実践形態であるという理解が成り立ち、その理論的前提を討議倫理学に求めることができるとしても、ソクラティク・ダイアローグが討議理論の他の実践形態とは区別される、他ならぬこの形態をもつのはいかなる根拠に基づくのかは、説明されない。

二、ネルゾンの「ソクラテス的方法」とソクラティク・ダイアローグ

では、ネルゾン自身が哲学の教育に用いていた独特の方法、「ソクラテス的方法（Sokratische Methode）」とは、どのようなものだったのか。[10]その内容を概観すれば、現在実践されているソクラティク・ダイアローグの原型が、ネルゾンのソクラテス的方法にあることを確認することができる。

ネルゾンのソクラテス的方法は、プラトンが伝えるところの、一対一の対話を基本とするソクラテスの対話とは違って、一人の教師と複数の学生とによって行われ、対話が行われるのは学生同士の間であり、教師は原則として対話の内容には介入せず、対話の進行を促すだけである。ソクラテス的方法における教師の役割は、はじめから独力で進むことを教え、生徒に責任をもたせることである。教師は哲学的な問いを問わないし、哲学的な問いを問われても答えない。ただ、学生の間で問いと答えのやり取りが続くようにするために、質問を促したり、発言の内容を確認したりするのみである。これは、教師を進行役に、学生を参加者に置き換えれば、今日のソクラティク・ダ

イアローグと同じである。少し異なるのは、今日のソクラティク・ダイアローグでは、テーマとなる問いは進行役によって準備されるが、ネルゾンは、学生が自ら問いを立てるところから始める。倫理学のゼミナールが一学期かけて議論した挙げ句、出発点の問い（「道徳的に行為するのは愚かではないか？」）が不適切だったという合意に到達したこともあったという。そのうち、学生たちの議論は迷走し、遂にはみんなどこに向かっているのかわからなくなり、途方に暮れてしまう。ソクラテスは触れるものを麻痺させる「シビレエイ」のようだと叫ぶメノンのように。これも現行のソクラティク・ダイアローグでよく経験される事態である。

ネルゾンは、ソクラテス的方法の授業の様子を具体的に記していないので、どのような問いが実際に立てられ、それを考えるためにどのような日常的経験の例が選ばれ、首尾よく議論が進んだ場合、どのような結論が出たのかは、よくわからない。しかし、日常的な経験の例に則して判断の前提を明らかにする作業を行っていたこと、それは、ソクラテス的方法に対してよくなされたという、事例や事実によって思惟の方向を定めるのは非哲学的だという批判や、その批判に対するネルゾンの反論からも明らかであろう。抽象的思考の陥りやすい誤りを避けるには、それを具体的に事例に適用する他なく、経験に足場をもつ遡及的抽象の道を自ら歩むことによってのみ、哲学を学ぶことができる、という反論である。経験に足場をもつこと、具体的な例に基づいて思考をすすめること、これも現行のソクラティク・ダイアローグがそのまま受け継いでいる点である。

このように、ソクラティク・ダイアローグの基本的な手続きは、ネルゾンのソクラテス的方法をほぼそのままの形で踏襲しているといってよい。さらに付け加えるならば、ソクラティク・ダイアローグの進行を規定する規則のいくつかも、すでにソクラテス的方法に見られるものである。ネルゾンによれば、グループで考えを吟味するに必

要な最低条件は二つある。一つは、自分の考えを伝達すること。既成の知識や伝聞ではなく、自分自身の考えを伝達することである。もう一つは、明確な言語を使用すること。はっきり聞き取ることができ、普通に理解できる発話こそが必要であり、専門用語は不要であるばかりか有害である。

三、ネルゾンの哲学

では、ネルゾン自身は、どのような根拠に基づいて、ソクラテス方法を実践していたのであろうか。その根拠はネルゾンの哲学とどのように関係するのだろうか。哲学の方法論に関する論文「批判的方法と心理学の哲学への関係(Die kritische Methode und das Verhäeltnis der Psychologie zur Philosophie)」(1904)[11]に則して、ネルゾンの哲学の構想を概観し、三つのテーゼにまとめてみる。該当箇所は、原文に付されている節の番号で示す。

(1)哲学の方法は遡及的抽象(regressive Abstraktion)である。

我々の日常的な判断(および評価)の基底には何らかの哲学的信念があるが、それは自然素質としての哲学である。その哲学的信念を言語化し体系化するのが学としての哲学である。自然素質としての哲学については論争は生じない。学としての哲学が、実際の適用を離れて抽象的に哲学的原理を主張すると、論争が生じるのである。その論争を鎮めるためには、日常生活の経験から、すでに意見の一致(合意)を見ている判断を選び出し、それらを分析し、遡及的抽象によって、それらに適用され、前提されている哲学的原理を究明しなければならない。(第二節)

遡及的抽象は、すでに受け入れられた帰結(判断、評価)の論理的根拠を明らかにするのであるから、哲学的原理を証明する(beweisen)のではなく、提示する(aufweisen)のである。そもそも、証明することができるのは

派生的原理であって、根本原理は提示することができるだけである。証明ができないとはいえ、遡及的抽象によって吟味される限り、根本原理は独断論とは異なる。（第三節）

遡及的方法には、抽象と帰納があるが、遡及的抽象は帰納から区別されなければならない。帰納によって根本原理を得ることはできない。（第四節）ソクラテスとプラトンは遡及的方法に訴えたが、アリストテレスは抽象と帰納とを混同した。この誤りは、カントが「形而上学的演繹（metaphysische Deduktion）」あるいは「基礎づけ（Grundlegung）」という形で遡及的抽象を哲学の方法することによって、ようやく正されたのである。（第六節）

(2)哲学的原理は非直観的な直接的認識（unmittelbare Erkenntnis）である。

遡及的抽象の手続きは、分析される所与の判断の真理性を前提とし、ある命題に事実合意する限り、その命題の可能性の論理的制約も認めなければならないという原則に従って進む。しかし、所与の判断が真であるとは限らない。そこで、今度は、遡及的抽象によって得られた哲学的原理に照らして、出発点となった所与の判断の妥当性が検証される。合意されたものであっても、その根拠が疑わしければ、所与の判断も疑われなければならない。（第七節）

だが、遡及的抽象による分析が終了し、哲学的原理を完全に過不足なく得たことは、いかにして知られるのか。判断は、その根拠となる判断を反省によって分析することができるが、その最終的な根拠、すなわち根本原理は、もはや反省によって分析できない直接的認識である。直接的認識としては、まず、直観的認識が考えられるが、人間にあるのは経験的直観と数学的直観のみであり、知的直観はない。とすれば、哲学的（形而上学的）判断の根拠は非直観的な直接的認識でなければならない。（第八、九、十節）

そもそも、真偽の概念が意味をもつのは、直接的認識があるからである。真偽は直接的認識を規準とし、偽の可能性は直接的認識からの隔たりを前提とするのである。真理の規準は認識と対象との一致ではない。認識と対象との一致を確かめるには、認識の外に出なければならないが、それは不可能である。したがって、直接的認識の真理性について議論の余地はなく、ただ、どの認識が直接的認識かだけが問題である。したがって、哲学の諸問題は次の問いに集約される。「何が純粋理性の直接的認識か?」(第十一節)

(3)哲学的原理の妥当性は理性の自己信頼によって検証される。

直観的認識は、直観を指摘することによって、すなわち論証(Demonstration)によって検証される。それに対して、哲学的(形而上学的)認識は、心理学的演繹(psychologische Deduktion)によって検証される。心理学的演繹とは、純粋理性の認識を内観を通じて内的経験から導出することである。心理学的演繹の手続きと遡及的抽象の手続きとは、相互に独立であり、心理学的演繹によって得られた内的経験の事実としての純粋理性の認識を、判断の遡及的抽象によって得られた原理とつきあわせることによって、哲学的(形而上学的)認識の妥当性を検証することができる。(第十四、十五節)

ネルゾンがフリースから受け継いだ、ア・プリオリな純粋理性の認識を内的経験の心理学によって発見するという発想は、一見矛盾しているが、ネルゾンの説明はそれなりに首尾一貫している。[12] すなわち、純粋理性の認識は経験的に知られるとしても、その妥当性は経験に依存しないと考えることができるのである。それに気づかないのは、方法論であるカントの「批判」を、体系の論理的基礎と混同している(フリースのいう「超越論的なものの先入観(das Vorurteil des Transzendentalen)」)からである。(第二十五節)そこから帰結するのは、哲学は合理的な学

であるから、批判は経験的—心理学的ではないという、フィヒテ流の見解か、批判が経験的—心理学的だとすれば、哲学は合理的な学ではなく経験心理学であるという、心理主義のいずれかである。（第二十四節）

さて、心理学的演繹から明らかになることは、「何が純粋理性の直接的認識か？」という問いに答えるのは、「理性の自己信頼（Selbstvertrauen der Vernunft）」だ、ということであるとネルゾンは言う。ある命題が哲学的（形而上学的）原理であることは、理性がそれを自らの直接的認識であることを認めることによって証明される他ない。（第十八節）理性の自己信頼がなければ、そもそも疑うということ、考えるということは不可能である。

四、ネルゾンの哲学と「ソクラテス的方法」

ネルゾンのソクラテス方法が遡及的抽象の実践であることは、すでに明らかである。ソクラテス的方法は、その基幹部分において、ネルゾンの哲学に基づいている。不明なのは、遡及的抽象における対話の役割である。先に、ソクラティク・ダイアローグとネルゾンの哲学の内的連関を否定する議論を見たが、その要点は、ネルゾンの哲学が本質的に対話を必要としないということであった。ネルゾンが対話的方法を採用したのは、もっぱら教育的配慮のためであり、対話は哲学の補助手段に過ぎないというのである。

確かに、ネルゾンの哲学が、非直観的な直接的認識と理性の自己信頼を方法とする限り、哲学的真理には、原理的には個々人が単独で到達し得るのであり、ネルゾンの哲学において、対話は、せいぜいのところ、先入観と誤謬を防ぐことによって、哲学的真理に到達するのを容易にする道具に過ぎないと見ることもできる。実際、ネルゾンは、ソクラテス的方法の意義は、他者とともに考えることによって一人で反省するよりも容易に真理に到達できる

ところにある、と述べている。そして、ソクラテス的方法を語る教師としてのネルゾンは、ソクラテス的方法によって哲学する方法を習得し、自立的に遡及的抽象によって直接的認識たる哲学的原理を明らかにし、それがまぎれもなく哲学的原理であることを理性の自己信頼によって悟った人であるかのようでもある。

しかし、ここから直ちに、ソクラテス的方法がネルゾンの哲学と本質的連関をもたないと結論できるとは、私には思われない。まず、遡及的抽象の出発点は合意の得られた経験的判断であるから、ネルゾンといえども、独りでは遡及的抽象を行うことができないからである。しかも、合意は常に偶然その場に居合わせた人々の合意であり、遡及的抽象は原理的にその都度の合意から出発するしかない。また、ネルゾンの「直接的認識」や「理性の自己信頼」といった概念を、個々の主観が単独で哲学的真理に到達できるという独我論的な発想に短絡的に結びつけることは、パラダイムの違いに無自覚な粗い議論に思える。シュネーデルバッハも言うように、批判的なディスクルスは、少なくとも潜在的には、対話的だといえるのである。[13] しかし、何よりもまず、ネルゾンは哲学の唯一可能な教育法として対話的方法を採用したということである。ネルゾンがソクラテスの権威に無批判的に従ったのでないとすれば、やはり哲学と対話との本質的な関係を観てとったからに他なるまい。

ネルゾンは、哲学的真理を学生に伝えようとすると、他人があれやこれやを哲学的真理と見なしたという歴史的事実になってしまい、それでは哲学を教えることにはならないという。「まじめに哲学的洞察を伝えようとする教師は、ただ哲学する技法（Kunst des Philosophierens）を教えようとすることができるのみである。」「それゆえ、そもそも哲学の授業などというものがあるとすれば、それは自分で考えるという形の、もっと精確にいえば、抽象の技法を自立的に実践するという形の授業でしかあり得ない。[14]」

哲学を通常の授業で教えることができないのは、一つには、哲学はいわば実習科目であって、スポーツと同じような性格をもつからである。自分で水に入って泳いでみないことには、泳ぎを習得することはできないのと同じように、自分で問いを立てて哲学してみない限り、哲学的真理を探究する方法を習得することはできない。だが、理由はそれにとどまらないように思われる。他の実習科目ならば、模範を見て形をまねてみること、倣びによる学びも大切な要素であろう。しかし、ネルゾンは倣びの方法をとらない。なぜか。

内山勝利は、プラトンの「対話篇」というスタイルの必然性を論じる論文で、ソクラテスの対話という方法と想起説について、次のように述べている。「無知の知」は、「真理の『客観的』所在を指し示す」だけでなく、「個の（主体的な）判断に進行をゆだねる対話的探究を必然化せしめる根拠」にもなっている。なぜなら、「無知の知」は、一切の「知的権威の存在を…絶対的に否定すること、既成の知の実質に満足しないことをとりあえず確認したうえで、知の再構築を始めようとするもの」だからである。この「主体性」と「客観性」という真理の二つの契機こそが、対話という方法の基盤を為しているのである。そして、「想起」とは、そのような「対話的探究」にあって、「問いかけが触発する思考力」のことである。知は、「人から伝え聞くことによって授けられるもの」ではなく、問いかけに触発された「想起」によって初めて「内実」をともなって「自己のもの」となるのである。(15)

ネルゾンのソクラテス的方法の根底にも、同じような洞察があるのではないだろうか。哲学することは、主体的に考えることを引き受け、同時に普遍性を志向して考えることである。そうである限り、権威に依拠しない対話という方法が要求されるのである。そして、それは、哲学の学生にとどまらず、哲学するものすべての人に言い得ることである。

それを傍証するのは、たとえば、『メノン』から有名な問答を引いて語るネルゾンである。[16]

「ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかがぜんぜんあなたにわかっていないとしたら、どうやってそれを探究なさるおつもりですか？」――「いやしくも以前にも知っていたところのものである以上、魂がそれらの物を思い起こすことができるのは、何も不思議なことではない。[17]」

ネルゾンは、この問答に、プラトンのイデア論ではなく、理性の自己信頼、理性の自立的な力への尊敬というソクラテスの精神を読みとろうとする。これはまさに「想起」を「問いかけが触発する思考力」と見なすことではないか。ここでは、「理性の自己信頼」は、哲学的真理の真贋を見極め、遡及的抽象に終止符を打つ切り札ではなく、共同の対話的探究を通じて、哲学的真理に到達することができることへの信頼なのである。このネルゾンは、独り哲学的真理を会得したと称する独断的教師ではなく、対話を通じて共同で探究する者の一人である。

ネルゾンのソクラテス的方法が単に教育的な意味しかもたず、それゆえネルゾンの哲学とは本質的な関係はないと断じるのは、早計だと言わねばならない。ソクラティク・ダイアローグを、単なる教育的技法に限定して考えることもまた、同様である。

註

(1) 以下のソクラティク・ダイアローグの紹介にはPPA/GSPのパンフレット *Das Sokratische Gespräch* を参照した。『臨床哲学のメチエ』Vol. 7に翻訳（森芳周訳）がある。

(2) G. Heckmann, *Das Sokratische Gespräch*, Frankfurt a.M., 1993, S.13

(3) B. Rähme, “Der Konsens in Theorie und Praxis des Sokratischen Gespräch”, in: D.Krohn/B. Neisser/N.

Walter (Hrsg.), *Diskurstheorie und Sokratisches Gespräch*, Frankfurt a.M., 1996, S.148

(4) G. Heckmann, *op.cit.*, S.13

(5) Rähme, *op.cit.*, S.147

(6) ibid., S.146

(7) "Das Sokratische Gespräch und die gegenwärtige Transformation der Philosophie", in: D. Krohn u.a. (Hrsg.), *Das Sokratische Gespräch. Ein Symposion*, Hannover, 1989, S.55

(8) H. Gronke, "Die Grundlagen der Diskursethik und ihre Anwendung im Sokratischen Gespräch", in: D. Krohn/B. Neisser/ N. Walter (Hrsg.), *op.cit.*, S.35

(9) ibid. S.36

(10) Nelson, *Gesammelte Schriften in neue Bänden*, Band I, Hamburg, 1970, SS. 269-316 要約的紹介として次のものがある。拙論「レオナルト・ネルゾンのソクラテス的方法」、『臨床哲学』第三号、二〇〇一年

(11) L. Nelson, *op.cit.*, SS.9-78

(12) vgl. K. Popper, *Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie*, 2.Auflage, Tübingen, 1994, S.110

(13) Schnädelbach, "Zum Verhaltnis von Diskurswandel und Paradigmenwechsel in Geschichte der Philosophie", D.Krohn u.a. (Hrsg.), *op.cit.*, S.29 f.

(14) L. Nelson, *op.cit.*, S.280

(15) 内山勝利、「対話と想起――プラトン哲学の『方法』――」、『哲学研究』第五百六十二号、第五百六十九号

(16) L. Nelson, *op.cit.*, S.297 f.

(17) 藤澤令夫の訳による。『メノン』、岩波文庫、一九九四年

（明治学院大学助教授　大学院後期課程退学）

Dialogue and Truth

— The Theoretical Ground of The Socratic Dialogue —

Toshiro TERADA

The Socratic Dialogue, a method of philosophical dialogue developed by a German philosopher, Leonard Nelson early 20th century, is praciticed today in diverse forms. It procedes in a unique way according to a set of rules, which fascinates and at the same time puzzles those who participate. What is the aim of the Socratic Dialogue? What is ground of its unique procedure? This paper aims to clarify the theoretical ground of the Socratic Dialogue, referring to Nelson's Philosophy. Today's Socratic Dialogue no doubt inherits Nelson's practice of Socratic Method, but the relationship between his practice and his philosophical theory is not necessarily clear, while it is obvious that the Socratic Dialogue owes what it is today to the experiences, not theories, of those who have been active in practicing the Socratic Dialogue, especially Gustav Heckmann. It can be reasonably assumed, howerer, that Nelson considered the dialogue essential in the art of philosophizing, not only of educational value.

キーワード：ソクラティク・ダイアローグ　レオナルト・ネルゾン　ソクラテス的方法　対話　遡及的抽象